

## 弁証法と共産主義

山 本 広太郎

はじめに

1. マルクス共産主義論の本質
2. 弁証法の限界
3. 「学位論文」における弁証法
4. 共産主義者マルクスの誕生
5. 共同本質による商品交換の否定
6. 『ドイツ・イデオロギー』・『共産党宣言』・『ゴータ綱領批判』
7. 共産主義に対する分析の拒否
8. 悦びとしての労働
9. 共産主義の矛盾—アリストテレスの指摘—
10. 「実存社会主義」によるマルクス共産主義論の検証

おわりに

はじめに

20世紀末の「実存社会主義」(20世紀に実存したソ連・東欧・中国などの社会主義)の崩壊により、マルクスの社会主義論に対する信頼は地に墜ちたと言っても過言ではない。今世紀における人々の社会主義への期待は、前世紀のそれよりもはるかには冷めている。

これに対して、「実存社会主義」の崩壊による、突然の安価な大量の労働市場の開放は、先進資本主義国の労働者を「過剰人口」と化し、大量の「産業予備軍」を発生させつつある。激化する資本主義の矛盾はマルクスの資本主義批判に対する信頼を高めつつある。

マルクスの社会主義論（小論では断りのない限り社会主義と共産主義とは同義）に対する信頼の低下とマルクスの資本主義論に対する信頼の高まりは、資本主義論と社会主義論を「表裏一体」の関係で提示したマルクスの問題構制の一体性を解体しつつある。

マルクス社会主義論のどこに問題があったのか？問題はマルクスには経済学的に分析された一定具体的な社会主義論が実は存在していなかったという点にある。マルクスは『資本論』に集約された透徹した資本主義批判を遺しているが、しかしマルクスは社会主義についての「青写真」を遺さなかったと言われているように、一定具体的な経済分析と経済政策を備えた社会主義論を遺さなかった。

しかるに、マルクスは資本主義と共産主義との間に、矛盾と矛盾の解消というヘーゲル弁証法を「適用」し、資本主義の矛盾と矛盾の解消としての共産主義という推論を導き、共産主義を人間の解放として描いている。

たしかに、マルクスは資本主義の矛盾を分析しているが、しかし、共産主義が矛盾の解消した社会であるという命題を論証も説明もしたわけではなく、じつはその命題は弁証法の「適用」による推論でしかなかった。

人間と人間との関係が抽象的であり、離れている間はそこに利害関係が発生せず、両者の間に対立・矛盾は生じない。しかし、2人の距離が接近し、具体的な関係を取り結ぶと利害の対立・矛盾が発生するようになる。

このことは社会全体についても言える。共産主義についてもマルクスのように、それを具体的に考察せず、人間の本質の実現として、「人間の解放」として抽象的に把握するかぎり、対立・矛盾は現われてこない。しかし、共産主義を具体的に考察すると、「実存社会主義」において実証されたような、それぞれの局面において対立・矛盾が現われてくるのである。「実存社会主義」の諸矛盾はじつは共産主義固有の矛盾と別のものではない。

「階級と階級対立のうえに立つ旧ブルジョア社会に代わって、各人の自由な発展が万人の自由な発展の条件であるような1つのアソシエーションが現われる」(MEW.Bd.4,S.482) というマルクスらの主張は、じつはヘーゲル弁証法を「適用」した推論以上のものではない。

「実存社会主義」が崩壊した今日、共産主義論を主張するのであれば、マルクスの推論を、「アソシエーション論」として反復するだけではすまない。なぜなら推論は外れたのだから。マルクスの社会主義論からソ連など「実存社会主義」が発生したのは紛れもない歴史的事実である。

## 1. マルクス共産主義論の本質

今日、「共産主義」と言えば、人々は20世紀に実存した社会主義がその典拠としたマルクスの共産主義を想起するであろう。もっとも、思想としての共産主義はマルクスに始まるものではなく、プラトンを始めとして古来より種々の議論が展開されてきた。

マルクスの共産主義論に先行するこれら諸々の共産主義論に対して、マルクスの共産主義論の特質はどこにあるのか？それはマルクスの共産主義論はヘーゲル哲学、その弁証法を母胎として生誕している点にある。エンゲルスはこの点を的確に次のように指摘している。

「もし、ドイツ哲学、とくにヘーゲル哲学というものが・・・存在しておらなければ、ドイツの科学的社会主義は、決して生まれてこなかったであろう」(1874年、MEW.Bd.18,S.516)。

「科学的社会主義はたしかに本質的にドイツの産物であって、その古典哲学が意識的な弁証法を生きいきと保持していた国民のもとでのみ、すなわちドイツでのみ、成立することができたのがある」(1882年、MEW.Bd.19,S.187)。

マルクスの共産主義論が、ヘーゲル哲学、その弁証法を母胎として成立していることは異論のないところであろう。

マルクスの共産主義論を肯定する者は、エンゲルスと同様に、この点をメリッ

トとして把握している。しかし、20世紀の「実存社会主義」によってマルクスの理論を検証する立場、すなわち現実でもって理論を検証するという私の立場、敢えて言えば唯物論的立場からすれば、逆に、この点にマルクス共産主義論の問題があると思われる。そしてここに20世紀の壮大な逆転劇、「実存社会主義」の生成と消滅の謎を解くカギがあると思われる。

マルクス共産主義論がヘーゲル哲学から生誕していること、これこそが問題である。なぜなら、共産主義は人間の考え方、すなわち哲学ではなく、人間の生活の仕方、すなわち経済学であるから、それゆえ哲学から生まれた共産主義（経済システム）を疑問としなければならないからである。

マルクスの共産主義論に従って成立した20世紀の「実存社会主義」が結局は崩壊した究極の理由は、マルクスの共産主義論が経済学的根拠を持ち得なかったからである。そもそもマルクスは共産主義についての「青写真」を遺さなかったと言われている。もちろん共産主義の詳細は歴史的諸条件に依存するが、共産主義の基本方針が必要であったが、しかしマルクスにはそれすらなかったのである。

レーニンが政治権力を掌握したとき、役に立つ共産主義の処方箋は何もなかったと言われている<sup>1)</sup>。共産主義についての「青写真」が存在しないという点ではスターリンも、そしてゴルバチョフも、その他、「実存社会主義」諸国の指導者も状況はすべて同じであった。だからこそ、「実存社会主義」諸国はじつに個性豊かな、様々な様相を呈することになったのである。しかし、その事業を首尾よく遂行した指導者が存在しなかった理由は、マルクスの共産主義論には一定具体的な経済的方針・政策が存在しなかったからである。

「革命的理論なくして革命的実践なし」との箴言は、社会主義（共産主義）についてもあてはまる。「共産主義理論なくして共産主義建設なし」である。

マルクスの共産主義とは、資本主義的私的所有の廃止である。マルクスの共産主義は資本一賃労働関係の廃止、階級の廃絶のみならず、私的所有すなわち

---

1) カール・R・ポパー、内田 詔夫ほか訳『開かれた社会とその敵・第2部』、未来社、1980年、82ページ



商品交換の廃止でもある。

マルクスは、人間と自然との関係における人間の本質を「類の本質」として把握し、賃労働者（プロレタリアート）を「類の本質」からの疎外として把握する。それゆえ、資本主義的私的所有を廃止すれば、人間の「類の本質」が実現し、プロレタリアートは解放され、人間が解放されると考えた。

「人間の自己疎外としての私的所有の積極的な止揚としての共産主義。・・・この共産主義は完成された自然主義として人間主義であり、完成された人間主義とし自然主義である。共産主義は人間と自然とのあいだの、また人間と人間との間の抗争の真実の解決であり、実存Existenzと本質Wesenとの、対象化と自己確証との、自由と必然との、個と類とのあいだの争いの真実の解決である。共産主義は解決された歴史の謎であり、自分をこの解決であると知っている」(MEW.EG I .S.536)。

他方、マルクスは人間と人間との関係における人間の本質を「共同本質」として把握し、私的所有のもとでの「交換は君の側からも私の側からも利己的 eigennützig な交換であって、それぞれの利己心 Eigennutz が相手の利己心にうち勝とうとするのだから、われわれは必然的に相手をだまそうとたくらむのである」(MEW.EG I .S.460)。それゆえ、私的所有を廃止さえすれば、人間は自らの本質を發揮し共産主義社会を実現するというわけである。

「人間の本質は、人間が真に共同本質 Gemeinwesen であることにあるのだから、人間は彼らの本質を發揮することによって共同体 Gemeinwesen を・・・創造し、産出する」(MEW.EG I .S.451)。

したがって、マルクスは単純に私的所有を廃止さえすれば、人間の本質、「類の本質」、「共同本質」が実現する共産主義社会が到来すると考えていた。

マルクスの共産主義に対する、この認識を端的に表現しているのは次の文章である。

「共産主義はわれわれにとっては、つくりだされるべきなんらかの状態、現実が則るべきなんらかの理想ではない。われわれが共産主義とよぶところのものは現在の状態を廃止する現実の運動である。」(MEW.Bd.3,S.35)

「共産主義者は、その理論を、私的所有の廃止という1つの言葉に要約する

ことができる」(MEW.Bd.4,S.475)。

しかしながら、論理的に考えれば、「共産主義が私的所有の廃止である」というマルクスの命題は、「私的所有が共産主義の廃止である」という逆の命題と同じく、それ自体、無内容なトートロジーにすぎない。しかるに、マルクスがこの無内容な命題をあたかも意味ありげに宣言した理由は、私的所有さえ廃止すれば、人間の本質、「類的本質」、「共同本質」が実現する共産主義社会が到来すると信じていたからである。

しかし、人間と自然(労働生産物を含む)との現実の関係は、マルクスが主張するような、労働に媒介された人間と自然の不可分性と、自然からの人間の自由を意味する「類的本質」によって、また人間と人間との現実の関係は、相互の労働生産物に対する欲望から推論される人間の相互利害の一致を意味する「共同本質」によって、すべてカバーされるほど単純なものではなかった。人間と自然との間の関係、人間と人間との間との関係は、それぞれ1つの「本質」、すなわち「類的本質」とか、「共同本質」だけから成っているわけではない。

たしかに、資本主義的私的所有を「類的本質」によって批判可能であり、商品交換を「共同本質」によって批判可能である。批判というものは現実のある一面から裁断できるものである。しかし、現実が多面的であり、それらがまた相互に絡みあうから、建設は、批判の基準となった一面から構成できるわけではない。資本主義批判は労働、所得、恐慌など様々な面において矛盾をもっているから、資本主義をある1つの尺度から、批判が可能である。しかし、共産主義がその一面からだけで構成できるわけではない。

批判と建設は同じものではない。批判は抽象的な一面から遂行可能であるが、しかし、建設は抽象的な一面から構成できるわけではない。

共産主義建設もまた具体的な経済システムであるから、資本主義批判の梃子となった概念、すなわち「類的本質」、「共同本質」だけをもって建設できるものではない。すなわち、共産主義は私的所有という「表皮」をとり除けば、人間の「類的本質」、「共同本質」が実現するという、「私的所有の廃止」に還元できる単純な作業ではない。

優れた批評家が優れた作家であるとは限らない。マルクスは優れた資本主義

に対する批判者であったが、しかし、一定具体的な指針をもつ共産主義論を遺していない。マルクスは価値論、剰余価値論の分析を通して『資本論』に集約された透徹した資本主義批判を遺しており、これがマルクスの知的権威の源泉となっている。翻って、マルクスの共産主義論を見れば、彼は共産主義についての「青写真」を遺さなかったと言われるように、一定具体的な指針をもつ共産主義論は何も遺していない。しかるに、マルクスの論理に従えば、共産主義は私的所有の廃止として、共産主義論が私的所有論に事実上、還元されているところから、マルクスが内容のある共産主義論を有しているかのような印象を与えるのである。しかし『共産党宣言』は単なる『宣言』にすぎず、そのうちの共産主義への言及に限ってみれば、内容は凡人でも思いつきそうなスローガンの列挙に止まっている。

マルクスは共産主義を正面から分析的しようというスタンスをもともと欠いている。共産主義は分析するまえに合理化され神聖化されている。その理由はマルクスの共産主義に対する受容の仕方にある。

抽象的な人間論を根拠に置き、牧歌的な共産主義像なら何枚でもスケッチを描けるが、一定具体的な共産主義像を描くとなれば、共産主義に内在する矛盾、すなわち、個人と全体の種々の矛盾に遭遇することになる。個人と個人の間でもそうだが、社会関係の場合でも、それが封建制であれ、資本制であれ、社会を抽象的に考察する限り、矛盾は顕現しないものである。しかし、個人と個人との関係でも、社会関係でも、それを具体的に考察するとき初めて利害関係の対立、矛盾が顕現するのである。

この事実は共産主義も利害関係をもつ人間と人間との関係である限り、全く同じである。もっともマルクスは人間の本質を「共同本質」として、人間の利己心を予め否定した非現実的な人間類型を想定しているから、共産主義社会を牧歌的に描くことが可能となる。マルクスの共産主義論が「実存社会主義」の分析に全く役立たない理由は、利己心をもつ現実の人間を否定しているからである。

社会主義経済についても、企業形態をどうするのか、中央計画当局と企業との関係をどうするのか、労働報酬をどうするのか、剰余労働の配分をどうする

のか、これらの経済問題を具体的に考察する段階になると、種々の利害の衝突・矛盾が発生することになる<sup>2)</sup>。

そのような具体的な問題を具体的に分析せずに、たんに生産手段の共同所有だけを主張する社会主義論は空想の域をでないことになり、ユートピア社会主義というほかない。社会主義論は一定具体的な方針、すなわち「青写真」が提示されて初めて、それが「科学的社会主義」であるか、それともないかの議論の対象になりうる。社会科学は具体的な問題を取り扱うから、抽象的な社会主義論を「科学的社会主義」と称することは強弁というほかない。<sup>3)</sup>

マルクスが共産主義を私的所有の廃止として、negativeに把握し、共産主義をpositiveに語らない理由はマルクスがヘーゲル弁証法を自らの議論の大前提に措定し、それを疑わなかったからである。

以下に具体的に見るが、マルクスは、処女作「学位論文」『エピクロスの自然哲学とデモクリトスの自然哲学の差異』（1841年）以来、『資本論』にいたる

- 
- 2) 20世紀の「実存社会主義」の経験のあとでは、共産主義研究は「実存社会主義」の分析を必要とする。かかる分析のなされた研究として、例えば、芦田文夫「第9章 市場を通じた社会主義と『株式会社』の役割」（基礎経済学研究所『未来社会を展望する 甦るマルクス』、大月書店、2010年、所収）がある。また森岡孝二氏は「社会主義について古い言葉を繰り返すだけではすまされなかった。・・・ソ連型社会主義が挫折したのは、理論が正しかったが実践が間違っていたからというわけではない。社会主義についての精緻な理論は、・・・マルクスやエンゲルスの著作のなかにもなかった」（『強欲資本主義の時代とその終焉』、桜井書店、2010年、p.332）と的確に指摘されている。
- 3) エンゲルスがマルクスの社会主義論を「科学的」だと主張する根拠は2つある。「史的唯物論と剰余価値による資本主義的生産の秘密の暴露」（『反デューリング論』MEW.Bd.20,S.26）。しかしエンゲルスが挙げている「科学的社会主義」の2つの根拠は、社会主義の内容に直接関係のない事柄であり、理由付けにすぎない。まず史的唯物論はそれ自身が論証されるべき事柄であり、根拠にはなりえない。また「剰余価値による資本主義の秘密の暴露」は、社会主義ではなく、資本主義の秘密の暴露であり、資本主義の矛盾が社会主義を科学にするものではない。拙稿「資本主義批判の射程—弁証法の罨—」（『経済学論集』（大阪経済法科大学）、第30巻第2・3合併号、2007年3月、参照。

なおマルクスの社会主義論について、それが「反ユートピアを装って主張されるユートピア」である、との指摘がある。G・M・ホジソン、若森章孝ほか訳『経済学とユートピア』、ミネルヴァ書房、2004年、p.6。

まで、ヘーゲルの神秘的側面、その観念論を早くから批判しているが、しかし矛盾と矛盾の解消というヘーゲル弁証法それ自体を疑っておらず、マルクス自ら「偉大な思想家（ヘーゲル）の弟子」（MEW.Bd.23,S.27.『資本論』「第2版後記」）を名乗っていたほどであった。

「その神秘化された形態では、弁証法はドイツのはやりものになった。というのは、それが現状を光明で満たすように見えたからである。その合理的な姿では、弁証法は、ブルジョアジーやその空論的代弁者たちにとって・・・恐ろしいものである。なぜなら、弁証法は現状の肯定的な理解の内に同時にまたその否定、その必然的没落の理解を含み、・・・その本質上批判的であり革命的であるからである」（MEW.Bd.23,S.27）。

## 2. 弁証法の限界

しかし、問題は矛盾と矛盾の解消というヘーゲル弁証法の限界にある。<sup>4)</sup> 歴史が矛盾と矛盾の解消というプロセスを展開するというマルクスの主張はヘーゲル弁証法に誘導された推論にすぎない。それを実証したのが20世紀の「実存社会主義」である。

「すべてを疑え」をモットーとしていたマルクスではあるが、しかし、ヘーゲル弁証法を最後まで疑わなかった。

矛盾と矛盾の解消Auflösungというヘーゲル弁証法の限界はどこにあるか？それはある1つの対象の矛盾とその矛盾の解消までは分析可能であるが、しかしその矛盾の解消のあとに何が出現するかということまでは弁証法は解明できないという点にある。矛盾と矛盾の解消というヘーゲル弁証法は、分析の対象が1個の矛盾をもつ有機体に限定される。マルクスの理論体系について言えば、矛盾と矛盾の解消という弁証法は資本主義の分析に限定されるべきである。これが矛盾と矛盾の解消というヘーゲル弁証法の限界である。事実、マルクスは

---

4) 「ヘーゲルの弁証法はしばしば『和解の弁証法』だと言われる」（中塾肇『弁証法』、中公新書、1997年、p.150

『資本論』において、ヘーゲル弁証法を適用して資本主義の矛盾を見事に分析している。まさに『不滅の資本論』(ア・ヴェ・ウローエヴァ)というべきである。

しかるに、マルクスは矛盾と矛盾の解消という弁証法に、その限界を超えた仕事をさせている。なぜなら、マルクスは資本主義と共産主義の関係に、すなわち2つの別個の経済システムの関係に、矛盾と矛盾の解消という弁証法を「適用」し、資本主義の矛盾と矛盾の解消としての共産主義という推論を導出した。しかし、弁証法といえども同時に2つの異なる対象を分析できるわけではない。矛盾と矛盾の解消という弁証法が分析できるのは、この場合、資本主義の矛盾と資本主義の矛盾の解消だけである。しかるに、マルクスは「共産主義者は、その理論を、私的所有の廃止という1つの言葉に要約することができる」として、共産主義を私的所有の廃止に事実上、還元することによって、資本主義の矛盾の解消を共産主義と同一視し、共産主義を矛盾の解消として、人間の解放として描写している。

しかし、共産主義が人間の矛盾を解消した社会、人間解放の社会であるというマルクスの主張は、マルクスが資本主義と共産主義の関係にヘーゲル弁証法を、弁証法の限界を超越して「適用」した推論でしかなく、マルクスが共産主義の経済学的分析を通して得た結論ではなかった。共産主義が果たして人間解放の社会であるかどうかは、弁証法の与り知らない事柄である。

しかるに、マルクスは共産主義経済の批判的分析を怠ったまま、ヘーゲル弁証法の外的な「適用」により、共産主義を矛盾の解消した社会だと推論し、その推論を逆に彼の共産主義論の大前提に置いている。

問題は1つの対象、1つの矛盾物しか分析しえない弁証法を、その限界を超えて2つの対象の関係に「適用」し、資本主義の矛盾と矛盾の解消として共産主義というエピステーメに1844年に到達したマルクスが、このエピステーメを土台として理論及び実践活動を展開したことにある。

資本主義に対しては『資本論』に象徴されるように透徹した分析を遺したマルクスが、共産主義に対しては、これとは全く逆に、分析的批判的精神が完全に消え失せ、後にみるが分析を拒絶する姿勢すら示している。マルクスの分析的批判的精神は資本主義批判までであり、共産主義論までには及んでいない。

「弁証法は現状の肯定的な理解の内に同時にまたその否定、その必然的没落の理解を含み、・・・その本質上批判的であり革命的であるからである」(MEW. Bd.23,S.27)。

弁証法の限界は「批判的であり革命的である」までであり、弁証法の射程は「革命後の社会」<sup>5)</sup>までは及ばない。

思考を柔軟にするために、20世紀の歴史の逆転に例をとり、「実存社会主義」から資本主義へ回帰を弁証法によって説明すればどうなるか? 「実存社会主義」が政治的自由の欠如と経済の停滞という矛盾を抱えていたが、「実存社会主義」と資本主義の関係に、矛盾と矛盾の解消というヘーゲル弁証法を「適用」し、「実存社会主義」の矛盾とその矛盾の解消としての資本主義という推論が導出可能となる。しかし、資本主義が果たして矛盾の解消した社会であるかどうか? マルクスが資本主義と共産主義の関係に、ヘーゲル弁証法を「適用」し、共産主義を人間の解放された社会だと推論することも、論理的にはこれと全く同じことである。1つの対象しか分析できない、矛盾と矛盾の解消という弁証法を、その限界を超え2つの対象の関係に適用すれば、その推論は、垣根を超えた「隣芝生は青い」という類の、単なる幻影にすぎず、理論的な根拠がない。

このような理論的根拠のない推論が20世紀の人々に訴え、歴史を揺り動かさせた理由は、1つは帝国主義戦争など資本主義の矛盾の激化であり、いま1つはマルクスの透徹した資本主義分析、及びその使徒レーニンなどの卓越した実践活動にあったと思われる。

マルクスの理論全体を再検討すると、マルクスは資本主義に対しては膨大な、分析的・批判的研究を遺しており、それが彼の理論的権威の源泉をなしているが、しかし、他方、共産主義に対して、『経済学・哲学草稿』に見られるような、ヘーゲル弁証法を適用した「人間の自己疎外としての私的所有のポジティブな止揚としての共産主義」という命題、『共産党宣言』に見られるような、スローガンを列挙したマニフェスト、さらには『ドイツ・イデオロギー』に見られる

---

5) ポール・M・スウィージー、伊藤誠訳『革命後の社会Post-Revolutionary Society』社会評論社、1990年。

ような、何の分析もない牧歌的な共産主義社会のスケッチなどに散見されるように、共産主義については分析的と言えるほどの著作はなにも遺していない。

資本主義の矛盾と矛盾の解消という共産主義、このエピステーメー（認識の台座）に比較的簡単に、すなわち1年前後の間というごく短時間に到達したマルクスは、このエピステーメーを批判的、かつ分析的に考察するという必要な作業を怠ったまま、逆に、このエピステーメーを理論の大前提として措定し、そのエピステーメーに合致するような共同本質Gemeinwesenという、非現実的な人間本質論、それに照応する、悦びだというこれまた非現実的な労働論を展開することになる。

しかし、これらの人間本質論、労働論は、ヘーゲル弁証法の限界を超えて推論された無矛盾の共産主義論、人間と人間とが和解した社会というマルクスの共産主義論のエピステーメーから、それに矛盾しない形で要請されたにすぎない観念的な人間本質論、現実ばなれした労働論にすぎない。

### 3. 「学位論文」における弁証法

次に、マルクスと共産主義との出会いをより具体的に見てみよう。マルクスも生まれながらの共産主義者ではない。問題はマルクスが共産主義を最初にごうように把握したのか、すなわちマルクス共産主義論の発生史、その本質にある。マルクスはヘーゲルの『法哲学』の批判的検討を通して共産主義に到達しているのである。

マルクスは共産主義を受け入れる以前からヘーゲル弁証法を自らの方法としていた。

マルクスは処女作「学位論文」『エピクロスの自然哲学とデモクリトスの自然哲学の差異』（1841年）において、ヘーゲル弁証法を駆使し、エピクロスのアトム（原子）論の積極的な意義を摘出している。エピクロスの原子論という対象の制約があるから、ここでは矛盾と矛盾の解消という弁証法は全体として考察されず、主としてエピクロスの原子論の奇怪な現象と奇怪な現象を生む予



盾が解明されている。

エピクロスの子の運動が直線的に落下せず偏りを生じること、原子の諸性質すなわち大きさ・形態・重さを、それぞれ持ちかつ持たないとして、すなわち矛盾として措定されていたことから、エピクロスの原子論は後世の研究者から嘲笑されてきたが、マルクスはエピクロスの原子（質料）のうちに形式としての自己意識（人間）を発見し、エピクロスの原子を形式Form（自己意識）と質料Materieの矛盾、本質Wesenと実存Existenzの矛盾として把握し、この矛盾から、エピクロス原子の鉛直線から偏る落下運動、矛盾する諸性質を見事に説明している。

マルクスは、エピクロスの自己意識が「抽象的個別的自己意識」であり、「自己意識がただ個別性の形式のもとで把握されているだけである」が、しかし、「自己意識の絶対性と自由」（MEW.EG I .S.304）がエピクロスの原子論の原理であることを解明し、それを高く評価している。人間の本質を自由にみて、その自由を矛盾として把握する点でマルクスはエピクロスの原子論に共鳴している。両者の思想の親近性があればこそ、マルクスはエピクロス原子論の謎を解明できたのである。

つぎにエピクロスの「天体論」を見ると、天体は自己意識と異なり、それ自身の重心を自分のうちにもつから、原子（抽象的個別的自己意識）に見られた形式と質料との矛盾、本質と実存との矛盾が解消している。天体は「現実（本質と実存の一致—山本）になった原子」（ibid.S.302）であり、天体では自己意識がもつ矛盾が解決され、「拮抗し合う諸契機は和解されている」（ibid.S.303）。それゆえ、抽象的個別的自己意識（人間）は天体のうちに、不俱戴天の敵を認識し、天体は「自己意識の平静を乱す」（ibid.S.304）ことになる。

「学位論文」において、使用されている範疇、形式と質料、本質と実存はヘーゲル『論理学』のものであり、自己意識を形式と質料との矛盾、本質と実存との矛盾として把握する方法はヘーゲル弁証法そのものである。

但し、「学位論文」ではエピクロスの原子論研究という制約もあるから、原子論の矛盾が解明されるに止まり、矛盾の解消が直接のテーマとなっているわけではなかった。

「学位論文」執筆（1841年）後、マルクスは1842年から43年にかけて『ライン新聞』の編集者となり、そこでマルクスが木材窃盗、土地所有問題などの「物質的利害関係」に関わることになるが、他方、「フランスの社会主義および共産主義の淡く哲学めいて潤色された反響が『ライン新聞』において聞かれるようになった」（MEW. Bd.13,S.8）。

マルクス自身は共産主義に対して当時賛同していたわけではなく、むしろ否定的でさえあった。

「私はこの生半可に対して反対を表明していたが、・・・私のそれまでの研究では、フランスの諸思潮（社会主義および共産主義及びその反響—山本）の内容自体についてなんらかの判断を取って下すことができないことを、率直に認め、・・・書齋に退いたわけである」（MEW.Bd.13,S.8）。

1843年には「この生半可（フランスの社会主義および共産主義及びその反響）に対して反対を表明していた」マルクスが、翌1844年には、プロレタリアートの解放、共産主義を宣揚するに至っている。わずか1年前後の間にマルクスの共産主義に対する態度は、逆転している。しかし、逆転は思想面であり、マルクスの弁証法は変わっていない。

マルクスの共産主義はエンゲルスが指摘するように、ヘーゲル哲学を媒介にして生れている。共産主義への転向にもかかわらず、マルクスにはそれ以前も以後も変わらない一貫した方法があった。それがヘーゲル弁証法である。すなわちマルクスの共産主義はヘーゲル弁証法によって把握された共産主義論である。その点にマルクス共産主義論の本質がある。

裏を返せば、マルクスの共産主義論は経済学的分析をはじめから欠いていたということである。この1年ほどの期間にマルクスは共産主義者に転向するが、この間のマルクスの著作には、彼に先行する他の共産主義に対する批判的コメントは散見され、彼の資本主義経済の分析は始まっているが、しかし、共産主義についての彼自身による経済学的分析はなにもない。

事実、この1年ほどの期間にマルクスが「企てた最初の仕事」は、ヘーゲル法哲学の批判的検討であった。「私を悩ました疑問の解決のために企てた最初の仕事は、ヘーゲル法哲学の批判的検討であって、その仕事の序説は、1844年

にパリで発行された『独仏年誌』に掲載された」(MEW.Bd.13,S.8)。

#### 4. 共産主義者マルクスの誕生

マルクスが共産主義者になったのは『ヘーゲル法哲学批判』「序説」と、『経済学・哲学草稿』においてである。いずれも1844年である。

『独仏年誌』に掲載された『ヘーゲル法哲学批判』「序説」において、マルクスは人間の解放の担い手としての「プロレタリアート」を発見するが、「序説」の方法もどこまでもヘーゲル弁証法に拠っている。マルクスはヘーゲル法哲学を次のように位置づけている。

フランスなど先進諸国民のもとではブルジョア国家の実践的止揚が現実の問題となっているが、遅れたドイツでは、その哲学的反映の止揚だけが問題となっている。すなわち「われわれは現代の歴史的な同時代人ではないが、その哲学的な同時代人である」(MEW.Bd.1,S.383)。

ヘーゲル哲学の批判とは、現実に対する批判と「政治的・法的意識」に対する批判とであるが、「政治的・法的意識のもっともすぐれた、普遍的な、学にまで高められた表現こそ思弁的spekulativ法哲学」<sup>6)</sup>(MEW.Bd.1,S.384)、すなわちヘーゲル法哲学である。

マルクスはヘーゲル法哲学を、ドイツの現実の矛盾を最高度に反映した思弁的な哲学として評価している。

ドイツの現実の矛盾と、それを最高度に反映したヘーゲル法哲学の矛盾、この2つの矛盾を相互止揚することがマルクスの課題となる。

この課題の担い手をマルクスはプロレタリアートに見出している。

「ドイツの解放のポジティブな可能性はどこにあるのか？ 解答Antwort。それはラディカルな鎖につながれた1つの階級の形成のうちにある。市民社会のど

---

6) 「思弁的なspekulativ」の意味については、ヘーゲル著 松村一人訳『小論理学』(上) 岩波書店、1978年、第82節、参照。

んな階級でもないような市民社会の1階級、・・・ひとことで言えば人間の完全な喪失であり、したがってただ人間の完全な回復によってだけ自分自身をかちとることのできる領域、こういった1つの領域の形成のうちにある。社会のこの解消Auflösungをある特殊な身分として体現したもの、それがプロレタリアートである」(MEW.Bd.1,S.390)。

プロレタリアートを担い手とした人間の解放により、ドイツの現実の矛盾と、それを反映したヘーゲル法哲学の矛盾、2つの矛盾が相即的に解決することになる。

「ドイツの解放は人間の解放Emanzipationである。この解放の頭脳は哲学であり、その心臓はプロレタリアートである。哲学はプロレタリアートを止揚することなしに実現されえず、プロレタリアートは哲学を実現することなしには止揚されえない」<sup>7)</sup>(MEW.Bd.1,S.391、詳細は、前掲、拙著『差異とマルクス』、第2章参照)。

『ヘーゲル法哲学批判』「序説」では「共産主義」という範疇は見られないが、プロレタリアートの要求が「私的所有の否定」(ibid.S.391)とされているから、「序説」がマルクスによる最初の「共産主義」宣言と言ってよいであろう。

マルクスの「共産主義」の本質はその生誕時において確認できる。この「序説」ですでに現われ、その後のマルクスの著作にも繰り返し現れるマルクスの共産主義の本質とは、エンゲルスが的確に指摘している通り、ヘーゲル弁証法(法哲学)の批判的検討を媒介として誕生していることであり、その結果、共産主義がそれ自体としてpositiveに規定されず、私的所有の廃止として、私的所有の矛盾の解消としてnegativeに把握されている点にある。

マルクス共産主義論を共産主義論という見地から、批判的に考察すればどうであろうか?そもそも共産主義とは人間の思考形式ではなく、人間がその中で生活する経済システムである。しかるに、マルクスの共産主義論は、「序説」を見れば分かるように、経済分析を通して提示されたものではなく、「ヘーゲ

---

7) 「政治的権力と哲学的精神とが一体化」という発想はプラトンの影響かと推察される。プラトン『プラトン全集11 クレイトポン・国家』、岩波書店、1976年、p.394、参照。

ル法哲学の批判的検討」を通して、矛盾と矛盾の解消というヘーゲル弁証法を私的所有と共産主義の関係に「適用」した結果として推論されている。したがって、マルクスの共産主義論はその成立において、すなわちその本質において、経済学的根拠をもっていないことになる。

ヘーゲルは『法哲学』において、矛盾と矛盾の解消という弁証法を「市民社会（ブルジョア社会）」と「君主制国家」の関係に「適用」し、「君主制国家」における「和解」を試みている。マルクスはこれを批判しているが（「ヘーゲル国法論批判」、MEW.Bd.1.）、しかしマルクス自身、矛盾と矛盾の解消という弁証法を資本主義的私的所有と共産主義の関係に「適用」し、共産主義を矛盾の解消した社会だと推論し、共産主義をアプリオリに合理化している。

この私の見解に対しては、たしかにマルクスは『ヘーゲル法哲学批判』「序説」（1843年末—44年1月に執筆）時点においては、哲学的な議論に終始しているが、しかし1844年以降、マルクスは経済学分析に精力を集中し、後日においてこの共産主義論を経済学的に補完しているのではないかという反論が予想される。

しかし、1844年以降のマルクスの経済学研究は、周知のように『資本論』に集約される資本主義についての研究であり、共産主義についての研究ではない。1844年以降における、共産主義についてのマルクスの言及はなにかと言えば、『共産党宣言』、あるいは『ゴータ綱領批判』が眼につく程度であり、そこでは共産主義における若干のスローガンは散見されるだけであり、共産主義経済を正面から分析しようとしたものではない。

したがって、マルクスによる共産主義論の概念は、1844年に執筆され、ともに矛盾と矛盾の解消というヘーゲル弁証法を適用した「序説」と『経済学・哲学草稿』において、マルクスの自己認識において「完了」していたものと言えよう。したがってマルクスの共産主義論は成立時点から経済学的分析を欠いており、それが以後も補完されることはなかったのであるから、マルクスの共産主義はヘーゲル弁証法による哲学的推論に過ぎないということになる。マルクスの『経済学・哲学草稿』（1844年）もまた、資本主義的私的所有と共産主義との関係に、矛盾と矛盾の解消というヘーゲル弁証法を適用したものである。但し「序説」においては、ブルジョア社会における「人間の完全な喪失」として抽象的

に把握されていたプロレタリアートが、資本主義的私的所有の下での「類的本質」からの疎外として、労働の次元においてより具体的に把握され、共産主義は「類的本質」の実現として把握されている。

しかし、『経済学・哲学草稿』でも確認すべきは、私的所有と共産主義の関係が、矛盾と矛盾の解消というヘーゲル弁証法の枠組みで把握されている点にある。マルクスの「類的本質」<sup>8)</sup>とは人間と自然（労働生産物を含む）との労働を媒介とする同時代的な不可分な一体性（同一性）、及び、それにもかかわらず、人間はその外的自然に対して、本能的に振る舞うのではなく、意識的に、自由にふるまう、ということである。

それゆえ、現実の賃労働者は人間一般としては「類的本質」であるが、しかし、特殊に賃労働者として見れば、労働生産物は自分のものではなく、労働そのものも自分のものではないから、「類的本質」から疎外されており、現実の賃労働者は類的本質であり、かつ、ないという矛盾を抱えることになる。これが現実の賃労働者が感じる矛盾にほかならない。

この賃労働者の矛盾の解消、類的本質の実現がマルクスの共産主義である。<sup>9)</sup>「人間の自己疎外としての私的所有の積極的な止揚としての共産主義。それゆえに、人間による、人間にとっての、人間の本質の現実的獲得としての共産主義。・・・この共産主義は完成された自然主義として人間主義であり、完成さ

8) むしろ一般的ともいえるから、いちいち、著書名を指摘しないが、Gattungswesenを「類的存在」と訳す論者は多い。しかしこれは『経済学・哲学草稿』の内容に関わる誤訳である（拙著『差異とマルクス』、青木書店、1985年、p.89参照）。なぜなら実証主義やブルジョア経済学のように直接的な存在Seinをそのまま受容せず、ヘーゲル『論理学』を踏襲して、「存在」を本質Wesenと実存Existenzの統一とその矛盾として把握するのが処女作「学位論文」以来のマルクスの方法であり、事実、『経済学・哲学草稿』においても、類的存在Gattungsseinと類的本質Gattungswesenとは明確に区別されている。Gattungssein類的存在はGattungsbewußtsein類的意識との対において（(MEW, EG1, S. 539)、Gattungswesen類的本質は類的実存に対立し、本質と実存の間に矛盾が把握されているからである。なお「類的本質」については、拙著『差異とマルクス』、第2章、参照。

9) 「存在が本質と一体となるべき類の人間というのは、経験的方法では立証が夢にすぎなかった、ということだ」（A・ヤコブレフ『マルクス主義の崩壊』、サイマル出版会、1994年、p.91）。

れた人間主義とし自然主義である。共産主義は人間と自然とのあいだの、また人間と人間との間の抗争の真実の解決であり、実存Existenzと本質Wesenとの、対象化と自己確証との、自由と必然との、個と類とのあいだの争いの真実の解決である。共産主義は解かれた歴史の謎であり、自分をこの解決であると知っている」(MEW.EG I .S.536)。

『ヘーゲル法哲学批判』「序説」において私的所有と共産主義との関係が極めて抽象的に、「人間の完全な喪失」と「人間の完全な回復」の関係として把握されていたが、『経済学・哲学草稿』の分析が労働の次元に立ち入っている。とはいえ『経済学・哲学草稿』の経済学的分析も資本主義についてのそれであり、共産主義の経済学的分析は皆無である。

それゆえ、ここでも確認しておきたいことは、矛盾と矛盾の解消というヘーゲル弁証法の貫徹にある。マルクスが共産主義者になる以前の処女作「学位論文」『エピクロスの自然哲学とデモクリトスの自然哲学の差異』(1841年)において既に、エピクロスの原子の概念のうちに「本質Wesenと実存Existenzとの矛盾」(MEW.EG I .S.289)を抽出していたが、その「本質と実存との矛盾」とその解消というヘーゲル弁証法のエピステーメが、『ヘーゲル法哲学批判』「序説」、さらには、『経済学・哲学草稿』においても、「通奏低音」として貫いており、<sup>10)</sup> 共産主義は経済学的分析のないまま、弁証法の「適用」によって、矛盾の解消として推論され、アプリアリに合理化されている。

## 5. 共同本質による商品交換の否定

マルクスの共産主義論の特質は、資本と賃労働という階級関係の解消であるだけでなく、私的所有の廃止、商品交換の廃止にある。マルクスは利己心を根拠とする商品交換が、相手を「だますbetrügen」ことだとして、単純に否定

---

10) 拙著、前掲書、参照。本書はマルクス解釈に止まり、マルクス共産主義論に対する批判的見地を欠いていた。但し、本書におけるマルクスによる資本主義批判は合理的であると考える。

的に把握している。

「われわれの交換は君の側からも私の側からも利己的eigennützigな交換であって、それぞれの利己心Eigennutzが相手の利己心にうち勝とうとするのだから、われわれは必然的に相手をだまそうとたくらむのである。」(MEW.EG I.S.460)。

マルクスは利己心を生命体としての人間の自然的属性としてではなく、私的所有が生み出す人間の属性、それゆえ利己心は私的所有を廃止すれば消滅する社会的歴史的な属性として把握している。

マルクスは資本主義社会におけるブルジョワ革命が利己心の解放をもたらすが、それは人間の本質、すなわち共同本質Gemeinwesenの実現ではないと批判する。

マルクスは「实际的な欲望、利己主義」を単純に否定的に把握している。

「『实际的な欲望、利己主義』は市民社会（ブルジョア社会）の原理であり、市民社会が自分のなかから政治的国家を完全に生み出すのと同時に、純粋にそれ自身の姿で現れる。实际的な欲望と利己主義の神は貨幣である」(MEW. Bd.1, S. 374)。

マルクスには利己主義と利己心（自愛心）の区別がなく、利己心が人間の自然的属性であることを否定している。マルクスは人間の本質が「共同本質」であるから、人間と人間の間には本来、利害の対立が存在しないと考えている。マルクスが共産主義を私的所有の廃止に還元する根拠には「共同本質」というマルクスの人間本質論が想定されているからである。

それではマルクスは、人間の本質が「共同本質Gemeinwesen」、すなわち「全体的本質totales Wesen」であることを如何にして証明するのが。マルクスは、2人の私的所有者が相手の労働生産物に対して感じる相互の欲望が、「全体的本質」、「共同本質」のその「証明」だと主張している。

「これら双方の対象物に対する憧れSehnsucht、すなわち欲望Bedürfnisは、私的所有者のおおの、次のことを示し、それを意識させる。すなわち、彼らはこれらの対象物に対して、それらを私的に所有する以外になおもうひとつの本質的なwesentliches関係をもっていること、彼らは自分でそう思っているよ



うな特殊な本質ではなく、全体的本質 *totales Wesen* であって、その諸欲望はすべての生産物に対して、他人の労働生産物に対しても、内的所有の関係にたっていること— なぜなら、ある事物に対する欲望は、この事物が私の本質に属していること、いいかえれば、・・・他人の労働の生産物に対しても内的な所有の関係にあることの・・・全く明白で反論の余地のない証明 *Beweis* であるのだから—・・・」(MEW.EG I .S.452)。

しかし、2人の人間が相互の労働生産物に対して感じる相互の欲望が、人間の本質が「共同本質 *Gemeinwesen*」、すなわち「全体的本質 *totales Wesen*」であることの、「全く明白で反論の余地のない証明 *Beweis*」だと言えるであろうか。

J・ロックは自分の身体は自分のものであるということから、自分の労働生産物は自分のものであると推論を展開したが、この推論には労働の投下という根拠があった。これに対してマルクスは欲望を根拠に、相手の労働生産物に対して「内的な所有 *des innern Eigentums* の関係」にあると推論し、人間の本質は「共同本質」、「全体的本質」だと推論している。

しかし、他人の労働生産物に対して欲望を感じることに、その欲望を実現することの間には、相手の同意が必要となるが、人間は自己の労働生産物を無償で手放すことがない。労働生産物の相互の譲渡にはルールが必要となるはずである。しかるに、マルクスは個人と個人との間の障壁を簡単に払い、欲望の直接実現論を説き、それを人間が共同本質であることの、「全く明白で反論の余地のない証明 *Beweis* である」と主張している。

しかし、富が溢れるような社会ではなく、労働生産物が有限であるような現実の社会では、このような欲望の直接実現論は合理的に機能しないのは明らかであろう。仮に、欲望を直接実現すれば、相互略奪の社会となるほかないであろう。

たしかに共産主義とは生産手段の共有であるが、しかし、生産手段の共有によって人間が利己心をなくし「共同本質」が実現するわけではない。マルクスの共同本質論においては、労働生産物の労働コストが無視されており、欲望の実現のみが考慮されている。これでは誰も労働しないであろう。あとで見るが、この労働コスト論を回避するために、マルクスは労働が本来的に悦びであると

いう見解を提示しているが、これは、非現実的な労働論でしかない。

人間と人間との関係は、相手の労働生産物に対する相互の欲望だけから構成されているわけではないから、それをもって人間の本質は「共同本質」であるというマルクスの主張はこれまた推論にすぎない。

マルクスの透徹した資本主義経済の分析に眼を奪われると、彼の共産主義論もまた分析的であるかのように誤認することになる。しかしそれは彼の資本主義分析の鋭さの反映でしかない。それは月光が太陽光の反映にすぎないのと同じことである。

マルクスには階級関係の分析はあるが、しかしアリストテレスの『ニコマコス倫理学』や、アダム・スミスの『道徳感情論』に匹敵するような、個人と個人の間関係を分析した著作はない。人間はアприオリに「共同本質」として把握されているから、そもそも個人と個人の間関係が問題になりえないのである。したがって共産主義を実現すれば人間が解放されるという単純な推論が展開されることになる。

マルクスは「共産主義は解かれた歴史の謎」(MEW.EG I.S.)であると主張しているが、しかし、仮にそうだとすれば、なぜ人類が何千年もこの単純な謎を解けなかったのか、こちらのほうがもっと大きな謎というべきであろう。

どのような経済システムが合理的か、それを考えるには人間の本質を考えねばならないが、それは、マルクスのように単に人間の欲望から推論し、「共同本質」であると推論できないことは明らかであろう。

マルクスは2人の人間が相互に感じる欲望から人間の本質が「共同本質」であると推論し、利己心は私的所有の産物であり、私的所有を廃止すれば消滅するものと把握している。人間の本質は利己心を持たない「共同本質」であるから、社会も共産主義となるというのがマルクス共産主義論の人間論的根拠であった。

「人間の本質は、人間が真に共同本質Gemeinwesenであるから、人間は彼らの本質を發揮することによって人間的な共同本質Gemeinwesenを・・・創造し、産出する」(MEW.EG I.S.451)。

しかし、マルクスの主張とは反対に利己心は私的所有に根拠をもつものでは

なく、人間、さらには生命体一般に共通する自然的な属性である。自足する神ならいざ知らず、生命体は生活資料を身体の外にもっており、生命の維持・発展は生命体自身に委ねられている。それゆえ利己心・自愛心がなければ、生命体の維持・発展は不可能となる。それゆえ所有制度というものを知らない動物の場合も利己心をもつことは日常的に観察される現象である。利己心は生命体のもつ自然的な本能にすぎない。

しかも人間は自己の生活を維持・発展させるために労働するから、利己心が労働の動因でもあり、社会全体からみれば利己心が生産力発展の究極の要因となる。それゆえ、経済学の要諦はアダム・スミスが指摘するように、利己心の活動を妨害しないことにある。経済が停滞している諸国を観察するとそこでは利己心が発揮できないか、発揮しても無駄な経済システムとなっていることが分かる。

したがってマルクスが『ユダヤ人問題によせて』において語るように、利己心をブルジョア的なものとして単純に否定すると、それが生産力発展の究極の要因を否定することになる。「実存社会主義」において見られた全般的な経済の停滞現象の理論的根拠はほかでもなくマルクスによる利己心の否定にある。

アリストテレスは自己愛を自然的なものとして把握している。「人はみな自分の自分に対する愛をいたずらに有しているのではなからうか、いや、これは自然的なものなのである。自己本位であるということは咎められるのが当然であるとしても、咎められるべきは単なる自己愛ではなく、守銭奴の金銭愛のような過度な自己愛である」<sup>11)</sup>

アダム・スミスもまた利己心を自然的なものとして把握している。「各人はたしかに自然によって、彼自身による配慮にゆだねられている……。したがって各人は彼自身に直接関係することについては、他のどんな人に関係することについてよりもはるかに深い関心をもつ」<sup>12)</sup>。

---

11) 『アリストテレス全集15 政治学 経済学』、岩波書店、1969年、p.48。なおこの箇所邦訳は分かりにくいから、筆者が英語版から訳した。THE WORKS OF ARISTOTLE, VOLUME X, Oxford at the Clarendon Press, p.1263b.

12) 水田洋訳『道徳感情論』、筑摩書房、1973年、p.129以下

スミスの理論体系によれば、利己心の発揮が「見えざる手」に導かれ、意図せざる結果として他人のためになり、それが社会の生産力発展の原動力となる。スミスもまた、アリストテレス同様に利己心を程度問題だととらえ、他の人々がついて行ける範囲まで、他人が同感できる程度まで利己心を引き下げなければならないとしている。

アリストテレスも、スミスもこの利己心をもつ人間を基礎に、人間と人間との関係を感情論を根拠として具体的に、すなわち質的・量的に考察している。

質的にというのは血縁・地縁など人間の親密度であり、量的にというのは人間と人間との「距離」である。一般的に言えば、平常時には、人間の他人への感情は親密度により強くなり、「距離」に応じて弱くなる。経済システムは生産力水準によるが、人間の自然感情に即応して考案されねばならない。マルクスの共産主義論はかかる具体的な人間の自然感情を無視した理性の要請にすぎない。

スミスは、人間が「利己的で本源的な諸情念」をもつから、疎遠な他人の最大の関心事よりも自分の小さな利害得失に関心をもち、遠隔地の大地震よりも自分の小さな不幸に関心をもちと述べている。このスミスの人間関係の感情論的把握は自然的なものであり、スミスが影響を受けたニュートンの「万有引力」の法則、 $F = m_1 m_2 / r^2$ に類似して、感情は人間の親密度に比例し、距離の「2乗」に反比例するものとも言えよう。<sup>13)</sup>

スミスの『諸国民の富』は資本主義を最初に包括的に分析したものであるが、それに先行する『道徳感情論』を前提に『諸国民の富』を見ると、『諸国民の富』はたんに資本主義経済分析の書であるのではなく、スミスの経験的な人間観察を土台にした経済政策論でもあり、道徳的・規範的意味を持つことが理解できる。

私的所有であれ、共同所有であれ、経済体制のあり方を提案する場合には、スミスが『道徳感情論』において展開している具体的な感情論に裏打ちされた人間関係論を経済学の基礎に置かねばならない。そうでなければ、「実存社会

13) 例えば、長尾伸一『ニュートンとスコットランド啓蒙』名古屋大学出版会、2001年、参照。また最近の労作として、有江大介「クラーク＝ライプニッツ論争（1715-16）の社会科学的含意」『エコノミア』第60巻第1号、2009年5月、がある。

主義」が実証したように、経済体制は砂上の楼閣となり存続できない。

マルクスには、利己心をもつpositiveな個人概念が欠落し、それゆえ階級関係論があるが、しかし個人と個人の間関係論が存在していない。<sup>14)</sup>『フォイエルバッハに関するテーゼ』『第6テーゼ』に端的に現われているように、マルクスは人間把握において歴史的な社会諸関係による規定性を強調するが、しかし、個人が生命体としてもつ自然的要因を、単純にブルジョア的なものとしてnegativeに把握している。その結果、マルクスは封建制の解体をとおして、ブルジョア民主主義革命を経て、近代の西欧を中心に展開されてきた積極的な個人概念を喪失している。

## 6. 『ドイツ・イデオロギー』・『共産党宣言』・『ゴータ綱領批判』

マルクスの共産主義についての基本概念は、いずれも1844年に執筆された、人間の解放を説く『ヘーゲル法哲学批判』『序説』、および「類の本質」の実現を説く『経済学・哲学草稿』、さらには「共同本質」の実現を説く『ミル・ノート』において、マルクスの自己認識において「完了」している。

なぜなら、それ以後のマルクスによる共産主義についての言及は『ドイツ・イデオロギー』における共産主義像の描写、さらには『共産党宣言』及び『ゴータ綱領批判』におけるスローガンの列挙に止まり、共産主義経済に対する理論的分析を志向したものは見られない。それゆえ、マルクスの共産主義論は1844年時点で、「完了」している。

とはいえ、これまで考察してきたように、1844年までのマルクスの共産主義論は、資本主義と共産主義の関係にヘーゲル弁証法を「適用」し、資本主義的私的所有の矛盾とその矛盾の解消としての共産主義という推論を展開したものにすぎなかった。

たしかに1844年以降、マルクスが経済研究を本格的に展開するが、それは周

---

14) この点では『アリストテレス全集13 ニコマコス倫理学』、岩波書店、1969年を参考になる。

知のように『資本論』に集約される資本主義経済の研究であり、共産主義経済の研究ではなかった。資本主義をいくら分析しても、共産主義について何も分からない。それは封建主義をいくら分析しても資本主義について何も分からないこととまったく同じである。

これに対して資本主義の矛盾が共産主義を生み出すのだから、資本主義の研究は共産主義に通じるのではないかという反論が予想される。しかし、資本主義の矛盾が共産主義を生み出すという命題自体が、マルクスの推論でしかなく、これこそが論証すべき問題なのである。

『経済学・哲学草稿』の約1年後の『ドイツ・イデオロギー』において、マルクスは共産主義社会を極めて牧歌的に描写しているが、そこには理論的な説明も分析もない。

「人間自身の行為が人間に対立するようになるのはなぜかといえば、それは労働が配分されはじめると、各人は自分に押し付けられるなにか特定の排他的な活動範囲をもつことになって、そこから抜け出ることができないからである。・・・ところが各人がどんな排他的な活動範囲をもつことがなく、どんな任意の部門でも腕をみがくことができる共産主義社会にあっては社会が全般の生産を規制し・・・今日はこれ、明日はあれをする可能性を与えてくれる。つまり狩人、漁師、牧人または批判者になるなどということなしに、私の気のおもむくままに朝には狩りをし、午後には魚をとり、夕方には家畜を飼い、食後には批判できる」(MEW.Bd.3,S.33)。

これはマルクスらによる共産主義社会の素描であるが、理論的根拠は示されていない。

マルクスらの共産主義への言及としては、次に『共産党宣言』が想起されるが、しかし『宣言』の内容をよく見れば、主として資本主義批判、及び他者の社会主義論に対する批判であり、マルクスらが共産主義について自己の見解を論じた箇所はわずかであり、共産主義10の諸方策、すなわち< 1. 土地所有の収奪、2. 強度の累進税、3. 相続権の廃止、4. 亡命者・反逆者の財産没収、5. 国家への信用集中、6. 国家への運輸機関の集中、7. 国有工場、土地の共同利用、8. 平等な労働強制、9. 農工結合、10. 公共的無償教育>という、これまた

相互の関係の説明すらないスローガンの列挙にすぎない (MEW.Bd.4,S. 481 f.)。

このスローガンを要約すれば、土地、生産手段、運輸、信用、労働、教育への「国家への集中と国家による統制」として、「極めて国家集中的な」<sup>15)</sup> 諸方策と概括できよう。

ところで、「実存社会主義」をしばしば「国家資本主義」として批判し、これとマルクス本来の共産主義、「アソシエーション」と区別し、対立させる議論（仮に「アソシエーション論」と呼んでおく）がある。

そのさい「アソシエーション論」が自らの典拠として引用するのは『共産党宣言』の次の一節である。

「階級と階級対立のうえに立つ旧ブルジョア社会に代わって、各人の自由な発展が万人の自由な発展の条件であるような1つのアソシエーションが現われる」 (MEW.Bd.4,S.482)。

しかし、『共産党宣言』のこの有名な「アソシエーション」は、ほかでもなく「極めて国家集中的な」諸方策の直後に、「階級差別が消滅し、すべての生産が結合された個人の手集中されると公的権力は政治的性格を失う」という認識が示されたあとに記載されている。したがってマルクス自身は「極めて国家集中的な」諸方策の延長線上に「アソシエーション」が現われると理解していたことは明らかである。

しかし、「国家集中的な」諸方策からは「国家集中的な」諸結果しか現われないことは、「実存社会主義」が実証したとおりである。

問題は「階級差別が消滅し、すべての生産が結合された個人の手集中されると公的権力は政治的性格を失う」というように、政治権力を単純に階級に還元させるマルクスの権力論にある。実存社会主義が実証したように、「階級差別が消滅」した後、「公的権力は政治的性格を失う」どころか、政治的性格を強化し、肥大化させていくのである。なぜなら、資本主義的私的所有のもとで

---

15) マルクスの「アソシエーション」概念に注目する田畑稔氏も「これらの方策は極めて国家集中的」だと指摘されている (『マルクスとアソシエーション』新泉社、1994年、p.108)。なお大谷禎之介氏の「アソシエーション論」に対しては、拙稿「スミス・マルクス・社会主義」、大阪経済法科大学『経済研究年報』、第15号、1996年11月、p.105以下、参照。

は、経済世界と政治世界は分離され、両者の相対的自立性が保証されるが、他方、生産手段が共同所有となれば、経済世界の自立性は私的所有という根拠を失い政治世界に吸収されることになるからである。

したがって、「極めて国家集中的な」諸方策から「アソシエーション」が現われるというマルクスの推論には理論的な根拠がない。

マルクスも、今日の「アソシエーション論」者も、その社会主義論が抽象的次元に止まっているから、「アソシエーション」というパラダイスを語りうるのである。しかし、企業形態、労働編成、労働報酬、剰余労働の配分、政治権力など社会主義論を具体的に考察する段階になれば、種々の矛盾・難問に遭遇するはずである。マルクスの社会主義論を反復しても意味がないのは、マルクスの社会主義論はヘーゲル弁証法の推論にすぎず、もともと肝心の経済学的分析を欠いているからである。

『共産党宣言』の他に、共産主義に関するマルクスの言及を探すと、『ゴータ綱領批判』がある。しかし、これも「批判」というタイトルが示唆しているように、マルクスが自らの共産主義論をpositiveに展開したのではなく、「ゴータ綱領」すなわちドイツ社会主義労働者党の綱領に対するマルクスの批判、コメントにすぎない。

またこの批判もマルクス自身が公表したのではなく、1875年、ゴータ合同大会のすこしまえに、ブラッケあてに送ったものであり、リープクネヒトラに回覧したあとマルクスの元に返送するようにと書いて発送した書簡にすぎず、それをエンゲルスが16年後の1891年に公表したものである(MEW. Bd. 22, S. 90)。

「ゴータ綱領」に対するマルクスの批判の要点は、この綱領が「分配のこと大騒ぎ」していることを誤りだとしながら、マルクス自身は共産主義の分配原則としては第1段階では「労働に応じた分配」を、第2段階では「必要に応じた分配」を妥当なものだと主張しているところにある。<sup>16)</sup>

16) この2つの分配原則も「ユートピア社会主義者」など先行の社会主義者の文献すで見られるものとの指摘がある(和田春樹『歴史としての社会主義』岩波新書、1992年、p.50以下)。



以上のように、1844年において、矛盾と矛盾の解消というヘーゲル弁証法を土台にして共産主義者になったマルクスは、それ以降も、共産主義を経済学分析によって補完してはいない。だとすれば、マルクスの共産主義論は結局、哲学的推論でしかなかったということになる。

## 7. 共産主義に対する分析の拒否

マルクスの共産主義論の特徴は、共産主義が経済学的に分析されず、私的所有の廃止としてnegativeに規定されている「消極的な共産主義論」である。

しかし、マルクスは共産主義を私的所有の廃止として定義しているが、しかし、それはヘーゲル弁証法に基づく推論でしかなく、実際には私的所有の廃止と共産主義とは全く別のことである。古い建物の解体と新しい建物の建築とは全く異なる仕事である。

共産主義とはなにかという問いに対して、私的所有の廃止と答えることは、私的所有とはなにかという問いに対して、共産主義（あるいは共同所有）の廃止と答えることと同様に、無内容なトートロジーである。私的所有一般はありえず、存在するものは特殊な私的所有であるように、同様に共産主義も共産主義一般はありえず、存在するものは特殊な、具体的な内容をもつ共産主義であることは、20世紀の「実存社会主義」諸国の多様性が実証したところである。共産主義を事実上、私的所有の廃止として把握する命題は無内容なトートロジーであるが、マルクスにとって、その命題が意味があるように見えるのは、マルクスが私的所有さえ廃止すれば、疎外がなくなり、「類的本質」、「共同本質」が実現し、共産主義は自ずと合理的に機能すると認識していたからである。しかしその根拠は矛盾と矛盾の解消というヘーゲル弁証法にあった。

したがって、ヘーゲル弁証法の「適用」によって、「人間の自己疎外としての私的所有のpositiveな止揚としての共産主義」(MEW.Bd.40,S.536.『経済学・哲学草稿』)という認識に1844年に到達したマルクスは、以後これを一度も疑うことなく、逆にこのエピステーメを確たる土台として、彼の理論活動と実践

活動を展開することになった。その結果、1844年以後のマルクスの研究はもっぱら、『資本論』に集約される資本主義的私的所有の分析・批判に向けられ、他方、共産主義論の研究は不問とされ、等閑視されることになる。それどころか、共産主義社会のあるべき姿に対する当然の疑問に対して、マルクスもエンゲルスも答えず、共産主義分析を意識的に回避している。すなわち、ここでは、マルクスらは、社会学者というよりも、難しい問題を回避する「政治家」として振る舞っている。

例えば、エンゲルスは「未来社会の詳しい組織に対する予測について、あなた方はわれわれのところに痕跡さえみつけないでしょう。われわれは生産手段を社会の手に持たせるだけでも満足です」(MEW.Bd.22,S.542)と述べている。しかし、社会主義とは生産手段の社会的所有だとするのは同義反復、無内容な主張であり、これではマルクス、エンゲルスの社会主義と他の論者の社会主義との区別すらなくなり、社会主義が事実上ブラックボックスになってしまうであろう。

「生産手段を社会の手に持たせるだけでも満足です」というエンゲルスの発言は、後日、「実存社会主義」が遭遇することになる社会主義の固有の問題を何も認識していなかった証左である。ハイエクはこの問題の所在を的確に指摘している。

「すべての生産手段が名目的に全体としての『社会』という手であろうと、独裁者の手であろうと、ただ1つの手に与えられる場合には、このような管理を行うものは、誰でも完全な支配権をもつに至る」。<sup>17)</sup>

マルクスもまた、共産主義の内容についての議論を回避している。

「将来の一定、所与の時点でなすべきこと、直接になすべきことは、いうまでもなく、行動がとられる所与の歴史的事情のいかんにかかわらず。しかし、この問題は、霧の中に存在し、したがって、実際には空想問題を提起するもので、それに対する答えはただひとつ、問題そのものの批判でなければなりません。既知数のなかに解の要素を含んでいない方程式はとけませ

---

17) F.A.ハイエク著・一谷藤一郎訳『隷従への道』、東京創元社、1989年、p.141

ん。・・・未来の革命の行動綱領の純理的な、必然的に空想的な先取りは、現代の闘争をそらすものでしかありません」(MEW.Bd.35,S.160f.)。

将来の行動は「所与の歴史的事情」によるという主張は一般論として正しい。しかし「未来の革命の行動綱領」、すなわち共産主義経済の分析と基本政策は不可欠である。これを欠いておれば、共産主義はブラックボックスとなり、実践は試行錯誤となるはずである。

ヘーゲル弁証法の「適用」による推論の結果として導出された、矛盾の解消、人間と人間との和解という抽象的なマルクスの共産主義論に止まる限り、「実存社会主義」が実証してみせた現実の社会主義の諸矛盾は現われてこない。その結果、牧歌的に描かれた、抽象的なマルクス共産主義論と「実存社会主義」の現実が対比させられ、最初は同一視された両者が、次には後者は前者からの「逸脱」だと非難され、最後には、両者は「無縁なもの」と切り捨てられることになる。

必要なものは抽象的な社会主義論ではなく一定具体的な社会主義論である。それを欠く社会主義論はユートピアの域をでることがなく、楽園に止まることになる。ハイエクの指摘はこの問題の核心をついている。

「多くの人々は単に社会主義の理想を抱いているに過ぎないにもかかわらず、自ら社会主義者を名乗っている。そういう人々は社会主義の究極の目的を熱心に信じているが、それらの目的がどうして達成されるのかということについて注意もしていないし、理解もしていない」。<sup>18)</sup>

## 8. 悦びとしての労働

弁証法によって共産主義を無矛盾的な社会と推論し、単に人間相互の欲望から人間の本質を「共同本質」として推論した結果、労働コストを無視することになったマルクスは、労働を逆に悦びだと把握することによって労働インセン

---

18) F.A.ハイエク、前掲書、p.50。

タイプの問題を「解決」している。

マルクスの「人間としての生産」が成立するためには、労働が悦びでなければならない。そうでなければ、人間は気前よく自分の労働生産物を他人に提供しないであろう。「われわれが人間として生産したと仮定しよう。そのときには、われわれはいずれも自分の生産において自分自身と相手を、二重に肯定したことであろう。1. 私の生産において、・私は活動の最中には生命発現を享受し、・・・個人的な悦びFreudeを味わう。2. 私の生産物を君が享受したり使ったりするとき、私は直接に次のような悦びを味わう、・・・他の人間的な本質の欲望に適合した対象物を供給したと意識する悦びを。3. 君にとって私は、君と類とをとりもつ仲介者の役割を果たしており、したがって、君自身が私を、君自身の補完物、不可欠な一部分として知りかつ感じてくれており、・4. . . . 私の共同本質を確証し実現した悦びを・・・味わう」(ibid. S.462)。

しかし、労働を単純に悦びと把握できるであろうか？ここでは「私の生産において、・生命発現を享受し、・・・個人的な悦びFreudeを味わう」ことと、「私の生産物を・他の人間的な本質の欲望に適合した対象物を供給したと意識する悦び」とが共存している。これは『共産党宣言』における「各人の自由な発展が万人の自由な発展の条件であるような1つのアソシエーション」(MEW. Bd.4,S.482)に照応しており、そこには個人と個人との間に利害の対立がないかのごとくである。

しかし、現実の労働は単純な悦びではなく、アダム・スミスが指摘するように「骨折り、犠牲」、すなわちコストでもあり、これが労働の主要な属性である。

マルクスは労働をコストとして、「骨折り、犠牲」と把握しているアダム・スミスを批判し、アダム・スミスが疎外された労働だけを見ていると述べている。

「A・スミスは労働を呪いと考える。『安息』が十全な状態として、『自由』、『幸福』と同一のものとして現われるのである。個人は・・・労働への欲求をもつものだということをアダム・スミスにはまったく思いもよらないものようである。」(MEGA1/1,S.499)。

しかし、マルクスのスミス批判は極めて一面的なものである。疎外の有無に

かかわらず、労働は遊びと違い、自己目的ではなく、生産物あるいはサービスを目的とする手段、労働の成果を享受するための手段である。その限り労働は「骨折り、犠牲」という性格をもつ。これが労働一般に共通する属性である。だからこそ、マルクス自身も「真の自由の国の根本条件」として「労働日の短縮」(MEW.Bd.25,S. 828)を挙げているのである。<sup>19)</sup>

労働が「骨折り、犠牲」としての性格をもつが、しかし人間は労働するのは自らの生活を改善するためである。したがって、労働と所得との間の相関関係が強いほど、労働インセンティブが強く働くことになる。

## 9. 共産主義の矛盾— アリストテレスの指摘—

矛盾と矛盾の解消というヘーゲル弁証法の呪縛にいったん囚われ、それでもって資本主義と共産主義の関係を理解すると、共産主義は人間と人間との和解が達成された社会、人間解放の社会だとア priori に認識することになる。しかし、これまで検討してきたように、マルクスの共産主義論は、ヘーゲル弁証法の限界を超えた推論でしかなく、もともと経済学的分析、経済学的根拠を欠いているものであった。

マルクスの社会主義はしばしば「科学的社会主義」と僭称されているが、抽象的なものは科学的ではありえない。なぜなら、社会科学は哲学ではなく、現実の科学であり、現実的なもの、具体的なものが初めて、合理的であるかどうか、「科学的」であるか否かの判断対象になりうるからである。

共産主義がもつ矛盾をつとに指摘しているのはアリストテレスである。

プラトンは守護者たちが妻女と子供を共有すれば、守護者たちは苦楽を共有することになり、その結果、国を團結させることができ、逆に苦楽の私有化は国を分裂させることになると考えた。例えば、われわれの1人が指を打たれたとする。そのとき、身体中に行き渡って魂にまで届き、その内なる支配者のも

---

19) マルクスの「労働時間の短縮」について、植村邦彦「W・シュルツの『自由時間』論：マルクスの時間の弁証法の一源泉」、『一橋研究』3(3),1978年12月、参照。

とに1つの組織を形作る共同体が、全体としてそれを感知して、痛められたのは1つの部分であるのに、全体がこぞって同時にその痛みを共にする。苦楽の共有が国家にとっての最大の善である、と。<sup>20)</sup>

これに対して、アリストテレスはプラトンの「共産主義」を次のように批判している。

共同体ができる限り1つであるということが、たとえ最もよいことであるとしても、そのことは「すべての人々が同時に（同一のものについて）私のものあるいは私のものでないものと言うならば」という表現によって決して示されるようには見えない。・「すべて」という言葉は曖昧である。ソクラテス（プラトンの『国家』はソクラテスの講話である）のいう意味は「すべて」であって、「すべてのうちのそれぞれのもの」ではない。<sup>21)</sup> 後者はできることではない。・・・大多数の人々にとって共同のものは気遣われることのもっとも少ないものだからである。なぜなら、彼らは自分のものには最も多く気にかけるが、しかし、共同のものには余り気にかけないか、あるいはそれぞれの人に関わりのある範囲において気にかけるからである。

また、労働と所有の関係についてアリストテレスは財産の共有に対して、・・・消費と労働において、各人の不等である場合、骨折ることが少なく受け取りが多い人々に対し、逆の人々から不平が起こるのは必然である。<sup>22)</sup> 共同は困難である。このことは旅行仲間の共有が明らかにしている。財産はある意味で共有しなければならないが、一般的に私有でなければならない、と。・・・共同所有のほうが、個々の所有よりも問題が多いと述べている。・・・（共有という）立法は外見が善く、人間愛的に思われる。万人が万人に対して驚くべき友愛を抱くようになると信じ、今日のもろもろの悪は財産が共有でないためと言うが、財産を共有し共同使用する場合のほうがよけい争う。共有によって免れる悪があるが、失う善もある、と。

プラトンの「共産主義論」の特徴は、人間感情の共有を根拠としているが、

20) プラトン、前掲書p.370。

21) 『アリストテレス全集15 政治学 経済学』、岩波書店、1969年、p.42。

22) アリストテレス、前掲書、p.47

しかし、それは理性的な要請にすぎず、不可能なことである。なぜなら、感情は個体としての身体に限界をもっており、したがってプラトンが言うような「苦楽の共有」ということは無理な要請である。これに対してアリストテレスは人間の、したがって個人の感情から「共産主義」（この場合はプラトンの）を具体的に考察している。

さきに見た、以下のマルクスの共産主義論も、プラトンと同様に感情共有論に立脚している。

「われわれが人間として生産したと仮定しよう。・・・われわれはいずれも自分の生産において自分自身と相手を、二重に肯定したことであろう。1. 私の生産において、・・・私は活動の最中には生命発現を楽しみ、・・・個人的な喜びを味わう。2. 私の生産物を君が享受したり使ったりするとき、私は直接に次のような喜びを味わう。・・・。3.・・・4.・・・私の共同本質を確認し実現した喜びを・・・味わう」（MEW.EG I.S.462）。

## 10. 「実存社会主義」によるマルクス共産主義論の検証

マルクスの社会主義論、「共同本質」という人間論、喜びという労働論の問題点を実証したのが、20世紀の「実存社会主義」である。

「実存社会主義」の経験を概括すれば、1つは経済発展の停滞現象であり、もう1つは政治的自由の欠如である。<sup>23)</sup> 主として経済停滞が理由となって、「実存社会主義」のほとんどの諸国が資本主義に回帰することになった。

「実存社会主義」においては、特定の国家プロジェクトにおいて突出した顕著な発展を遂げることもありうるが、しかし一般的には労働インセンティブが欠如し、経済の停滞現象が蔓延化した。

人間が利己心をもつのは自然的な感情である。人間の自己感情は自分自身の

---

23) 官僚制の問題については、田中雄三「市場原理と社会主義」、『唯物論と現代』、第9号、1992年4月、および荒木武司「技術・分業・組織の構造的連関とマルクス『社会主義』論」、大阪教育大学公民学会『公民論集』第16号、2007年、参照。

身体に限界をもっており、他者への関心は「想像上の立場の交換」を通してなされるが、それは人間と人間との関係の質的親密度に比例し、量的距離に反比例する。これがスミスらの人間関係論であり、マルクスには欠落している自然感情論である。労働それ自体は一般に「骨折り、犠牲」であるが、それでも人間が労働するのは直接には自己及び家族の生活のためである。

したがって、経済システムはこの人間の自然感情をよく組織できるものでなければならない。しかるに、私的所有を廃止し、市場経済を廃止すると、個々の労働量を客観的に計測する手段を失うことになる。労働量の評価は企業管理者の主観、裁量に委ねられることになる。その結果、労働と所得（賃金）の相関関係が希薄になり、労働インセンティブを欠くことになる。

これに対して、資本主義的私的所有のもとでは、市場において労働生産物の交換を通して、事後的にはあるが個々の労働量が比較的客観的に評価されるから、労働と所得の間に相関関係が感じられ、労働インセンティブが働くことになる。市場経済は労働インセンティブを内蔵した経済システムであるから、「実存社会主義」のように、労働インセンティブを様々な手段により「刺激」する必要がない。

共同所有の社会になれば、怠惰がはびこるということは、古来より多くの論者が指摘したところである。

また実践的に見れば、ロバート・オーウェンが1825年にインディアナ州のニュー・ハーモニーで設立した共同体が失敗した原因も、働かず分け前にあずかる「フリーライダー」の問題を解決できなかったことにあると言われている。<sup>24)</sup>

ソ連の歴史は、マルクスの社会主義論に従って、建前において人間の利己心を否定しながら生産手段の集団化・共有化を進めるが、それでは労働インセンティブが機能しないところから、表向きマルクスの社会主義理論により理論的に否定されていた利己心に働きかけざるをえず、労働インセンティブを「刺激」するために種々の「経済改革」、「市場化」を積み重ねてきた歴史である。しかしブレジネフ時代の長い経済停滞後、ゴルバチョフが登場するが、「ペレスト

24) リチャード・バイプス著、飯島貴子『共産主義が見た夢』、ランダムハウス講談社、2007年、p.21.



ロイカ」によっても有効な社会主義的経済システムを発見できず、遂にはソ連が崩壊することになった。

人間論に限っていえば、ソ連の歴史は「共同本質」と利己心という、建前と本音を2つの焦点とする楕円活動にたとえることが可能である。ソ連の歴史は前半においては利己心から遠ざかっていく楕円が結局は利己心に引き戻され終息した楕円運動であったといえよう。ソ連の学者ほど労働インセンティブについて熱心に研究した研究者はあるまい。原理的に利己心を否定しておいて、すなわち解答を否定しながら、労働インセンティブをどう刺激するかという解答不能の問題を解くのであるから、議論は噴出し、終焉することがない。<sup>25)</sup>

このような共同所有における労働インセンティブの欠如という問題はマルクス自身も気づいていたが、マルクスはこの問題を正面から考察せず、切り返しのな揶揄的な反論で切り抜けている。

「私的所有の廃止とともに、すべての活動がやみ、一般的な怠惰が蔓延するであろう、という異論がある。この考えに従えば、ブルジョア社会は、怠惰のためにとうの昔に破滅していたに違いない。なぜなら、この社会では働く者は儲けない、儲けるものは働かない、からである」(MEW.Bd.4,S.477)。<sup>26)</sup>

『共産党宣言』は政党のマニフェストであるという政治的文書であるからと言えばそれまでであるが、マルクスにしばしば見られることであるが、共産主義の問題に対して正面から答えず、代わりに資本主義批判で「答えている」。

個人レベルについて言えることは企業レベルでも言えよう。市場をもたない企業は、法人としての利益追求、すなわち利益インセンティブを欠くことになる。その結果、企業管理者の関心は消費者の需要・欲求に向かわず、企業を統括する上部の官僚組織との交渉に向かうことになる。個人のみならず、企業も労働インセンティブを欠くことになる。人間は利己心が労働インセンティブの源泉であるが、これが機能しない経済システムは機能不全に陥ることになる。私的所有を廃止しても人間の利己心がなくなるのは、利己心が生命体に根

25) 例えば、宮坂純一『社会主義経営とモチベーション』、中央経済社、1989年、参照。

26) A・ヤコブレフは「マルクスらの分析は信憑性を欠いている」と的確に批判している。前掲書、p.98

拠をもつからである。したがって、企業形態は人間の利己心を前提として組織されねばならない。

「実存社会主義」が崩壊した直後、もっとも引用された箴言はアダム・スミスのものであった。

「人間はつねに同胞の助力を必要としながら、しかもそれを同胞の仁愛 benevolence だけに期待しても徒勞である。そうするよりも、もし彼が、自分に有利になるように同胞の自愛心 self-love を刺激することができ、しかも彼が同胞に求めていることを彼のためにすることが同胞自身のためにも利益になるのだ、ということを示してやることができるならば、このほうがいっそう奏功する見込みが多い」。<sup>27)</sup>

アダム・スミスの経済学は『道徳感情論』における人間関係論によって裏付けられている。これに対して、マルクスは、価値論、剰余価値論など資本主義経済の分析において、アダム・スミスを凌駕しているが、しかし、人間論についてみれば、マルクスには個人の感情を具体的に分析した書物がない。マルクスの人間論は階級関係に還元されており、「類的本質」であれ、「共同本質」であれ、経済体制論の変革に合わせて想定されているように見える。その限り、マルクスの人間論の抽象性、一面性は否めず、人間を経験的に全面的に分析するという視点が見られない。

ヒュームの言うように、人間論が諸科学の「本丸」であるとすれば、<sup>28)</sup> 壮大な展望をもつマルクスの共産主義論を支えるには、彼の人間論はあまりにも抽象的であり、経験的な人間観察を欠いた理性主義的なものといわねばならない。これでは新しい具体的な経済システムを支えることはできない。マルクスが描いた人間像と、「実存社会主義」における現実の人間との乖離は甚だしいものがあるが、「間違っていた」のは後者ではなく、前者であった。

27) アダム・スミス、大内兵衛ほか訳『諸国民の富』、岩波書店、1969年、p.82

28) ヒューム『人性論』（『世界の名著』32）、中央公論社、1980年、p.409。

おわりに

マルクスは透徹した資本主義批判を遺しており、これが彼の知的権威の源泉である。しかし、彼の共産主義論は、資本主義と共産主義の關係に矛盾と矛盾の解消というヘーゲル弁証法を適用した推論であり、具体的な経済学的分析を欠いているものであり、依然として抽象的な共産主義論、したがってユートピアの域を出ないものである。マルクスは自らの共産主義論を合理化するために、「共同本質」としての人間論、悦びとしての労働論を展開しているが、これらは現実の人間、現実の労働の一面を全面化させたものにすぎない。しかるに、マルクスの共産主義論が20世紀の人々に対して魅力を持ちえた理論的理由は、『資本論』に象徴される透徹した彼の資本主義分析にあった。

マルクスの資本主義批判と共産主義論は「表裏一体」の關係で、ワンセットで提示されているが、しかし、われわれはマルクスに対しても分析的、批判的に対応しなければならない。すなわち彼の資本主義批判は継承すべきであるが、しかしその共産主義論は根本から再検討されねばならない。

本論文は、日本学術振興会（アジア研究教育拠点事業）の支援を得た。

